「アル」・「イル」・「オル」による アスペクト表現の変遷

井 上 文 子

キーワード：方言のアスペクト・進行態・結果態・十津川方言

要 旨

アスペクト表現において進行態と結果態とを区別しなくなるという変化は、西日本全域に見られる大きな流れの中に位置づけられる。その一事例として紀伊半島十津川流域における動態をとりあげて考察する。

このような「～テ」による進行態・結果態の統合については、文献においても方言と同様の変遷が読みとれる。ここでは、実際の文献には現れないが変化の方向から見て可能な体系を再構する。そして、この推定体系は理論上のものだけではなく、実際に方言として存在していることを明らかにする。

文献における各体系と各地方言との対応関係に基づいて、「アル」・「イル」・「オル」によるアスペクト表現の歴史について総合的な解釈を試みる。文献に現れた変化と方言に生じている変化は同じ流れの上にあり、かつて中央で起こった変化が方言に投影している。現在の方言分布は歴史的変化の縮図とも言えるのである。

また、ある形式の消滅過程において、限定された表現形によってのみ、本来その形式の持つ意味の一部分である限定された用法が残存するという現象を指摘する。

1 「～テ」による進行態・結果態の区別とその統合

標準語では「～テイル」で表現するところを、西日本各地では「～ヨル」・「～トル」などで表すことはよく知られているが、進行態と結果態の言い分けについては、区別が明確であるもの、一部使い分けをするもの、まったく区別をしないもの、と地域によってさまざまな状況を呈している。

まず、その一事例として、紀伊半島十津川流域におけるアスペクト表現の進行態と結果態の区別に関する動態から見ていくことにする。

1-1 進行態

図1は「鐘が鳴っている」というコンテクストにおける「～ている」(進行態)の部分の表現形のグロットグラムである。[注1]

南部の和歌山県新宮市・熊野川町・本宮町には「～ヤル」が集中して現れている。具体的には「鳴りヤル」という形である。若年層ではこの形が奈良県側の十津川村七色にまで入りこんでいる。この一帯では新宮市が経済・文化の中心地であり、その影響が北上して十津川村の若年層に及んでいるわけである。

北部の奈良県五條市・西吉野村・大塔村・十津川村には広く「～トル」が分布している。和歌山県側の本宮町萩にも見られる。具体的には「鳴っトル」という形である。

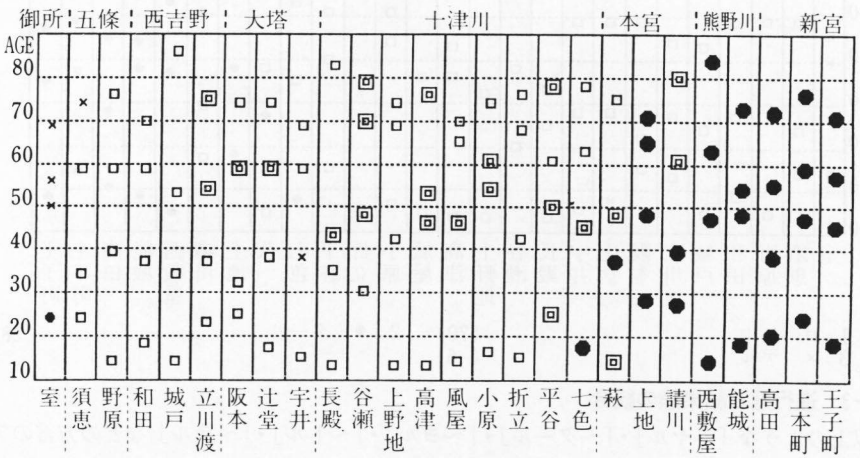
そして、南の「〜ヤル」と北の「〜トル」に挟みこまれるようにして存在するのが「〜ヨル」である。具体的には「鳴りヨル」という形である。「〜ヨル」が現れるのは西吉野村立川渡・大塔村・十津川村・本宮町の主に40代以上に限られる。若年層には「〜ヨル」はほとんどなく、大部分を「〜トル」が占めている。このことから、これらの地域では「〜ヨル」から「〜トル」への交替が起こったと考えられる。「〜ヨル」は「〜トル」によって圧迫され、かつ「〜ヤル」の進出も加わって、地域的にも年層的にも領域を縮小し、衰退の傾向を見せているのである。

大塔村での重点調査の結果（井上1990）によれば、やはり「〜ヨル」の後退が顕著であり、高年層で30%の使用率のある「〜ヨル」が若年層では消滅寸前であることが明らかになっている。「〜ヨル」は結果態と共通の形式「〜トル」・「〜テル」に取って代わられつつあるのである。「〜ヨル」の消滅は，後述するように、進行態と結果態を区別する体系の消失を意味している。

ところで、本宮町と十津川村の南部には、「〜ヤル」とともに「〜トル」よりも「〜ヨル」が多く見られる。このように「〜ヤル」と「〜ヨル」とが混在するのは、両形ともに進行態のみを表す形式であり、アスペクトの切り取り方や構造が共通していて、その交替が起こりやすいためであろうと考えられる。

なお、「〜テル」は北部の御所市にかたまって見られる。具体的には「鳴っテル」という形である。これは奈良盆地、そして関西中央部へとつながるものである。

図1　鐘が鳴っている（進行態）



1-2　結果態

図2は「窓があいている」というコンテクストにおける「〜ている」（結果態）の部分の表現形のグロットグラムである。

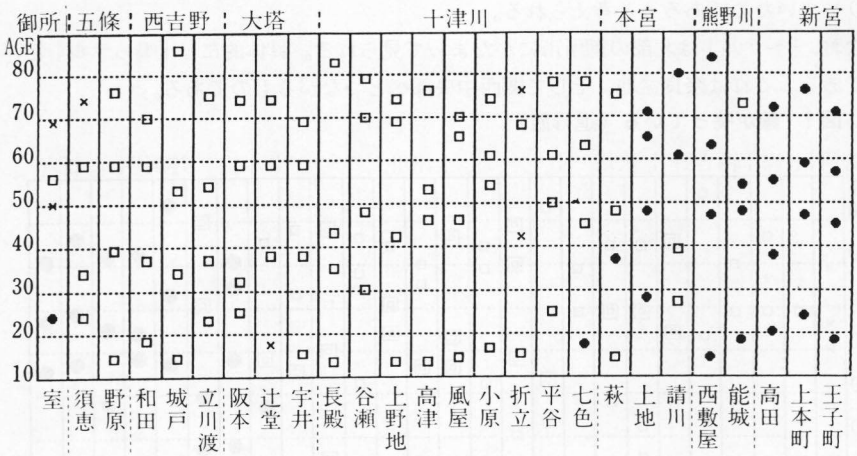
和歌山県と奈良県の県境をほぼ境として地域が二分されている状況が認められる。

その一方は、南部の新宮市・熊野川町・本宮町に集中して分布する「〜タール」の領域である。具体的には「あいタール」という形である。若年層ではこの「〜タール」が奈良県側の十津川村七色に入りこんでいる。進行態の場合と同様、新宮市の影響が及んでいることが見てとれる。なお、「タール」は北部の御所市にも存在するが、両者では用法が異なっている。新宮市・熊野川町・本宮町・十津川村七色の「〜タール」は結果態のみを表し、主語が物・人・動物のどの場合にもかかわりなく用いることができる。たとえば、「子供が立っタール」、「鶏が死んダール」などとも言えるのである。これに対して、御所市の「〜タール」は進行態・結果態の両方を表し、主語が物の場合のみに用いられる。この御所市でのような用法は奈良盆地の一帯において認められるものである。

もう一方は、北部の御所市・五條市・西吉野村・大塔村・十津川村に広く分布する「〜トル」の領域である。具体的には「あいトル」という形である。

「〜テル」は進行態の場合と同様に御所市にかたまって見られる。具体的には「あいテル」という形である。これは関西中央部につながるものである。なお、これ以外の「〜テル」は散在しているところから、標準語からの影響によるものと考えられる。

図2　窓があいている（結果態）



1-3　進行態と結果態の統合

以上のような「〜ヤル」・「〜タール」・「〜ヨル」・「〜トル」・「〜テル」などの方言のアスペクト表現形式は人の存在を表す語と対応関係にあると言われている。

紀伊半島では「人がいる」を表すのに「アル」・「オル」・「イル」が用いられる。「アル」は西部から南部にかけての海岸部に、「オル」は山間部に分布している。アスペクト表現形式もこれに対応して、「アル」の地域では「〜アル」>「〜ヤル」、「〜テアル」>「〜タール」を、「オル」の地域では「〜オル」>「〜ヨル」、「〜テオル」>「〜トル」を、使用することが多い。ちなみに「イル」の地域では「〜テイル」>「〜テル」を使っている。

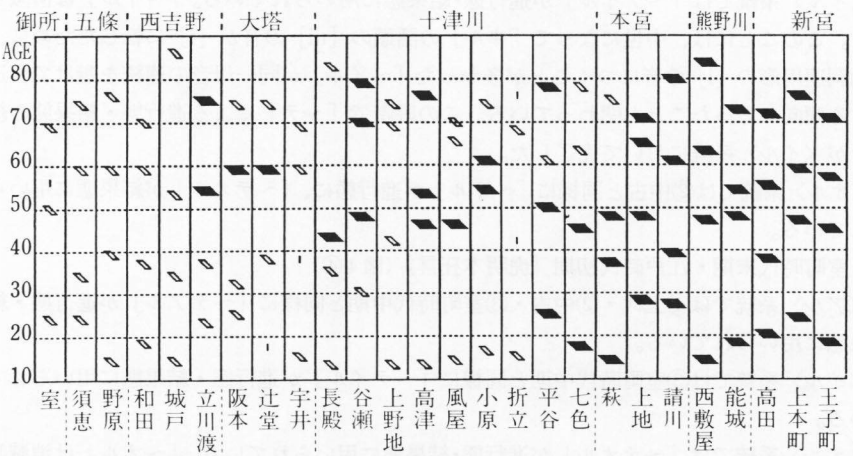
さらに、「アル」の地域では「～アル」／「～テアル」で、「オル」の地域では「～オル」／「～テオル」で、進行態／結果態の使い分けをすることが多い。つまり、「～テ」のあるなしによって進行態と結果態の区別を行っているということになる。ここでのグロットグラムにおいては、「アル」の地域では「～テ」による区別が完全に保たれているが、「オル」の地域では進行態「～テオル」・結果態「～テオル」のように両者の区別がない体系も存在する。

図1と図2とを総合し、進行態と結果態の区別のあるなしを示したのが図3である。

「区別なし」は御所市・五條市・西吉野村北部と大塔村・十津川村の若年層に現れ、「区別あり」は新宮市・熊野川町・本宮町と十津川村・大塔村・西吉野村南部の40代以上に見られる。このことから明らかに「区別なし」が新しく、「区別あり」が古いと認められる。

このグロットグラムでは、北から進行態・結果態とを区別しない新しい体系が若年層に食いこむように侵入してきているのが読み取れる。すなわち、南に行くにつれて、進行態と結果態とを区別する古い体系が存在していることになる。このように両者を区別しなくなるという変化は日本語史上の一傾向であるが、現代においては標準語の干渉も無視することができない。進行態・結果態統合の動きは、この地域を含め、西日本全域に見られる大きな流れの中に位置づけられるのである。

図3　進行態と結果の区別



2　文献における状況

「～テ」による進行態・結果態の統合については、文献においても方言と同様の変遷が読みとれる。

2-1　変遷

上代から近代までのアスペクト表現形式の流れを素描したものに柳田1990がある。ここ

では、その記述を参照しつつ、対象を「動くもの」が主語である場合に焦点をあてて、進行態・結果態の変遷をたどってみたい。ただし、いわゆる完了の助動詞として定着した「タリ」・「リ」については考察の圏外に置く。

① 上代『万葉集』(図4①)

〈アル〉系統では「～テアリ」が進行態・結果態に用いられている。

〈イル〉系統では「～キル」が進行態に用いられている。「～テキル」は存在しない。

〈オル〉系統では「～ヲリ」が進行態に、「～テヲリ」が結果態に用いられている。

② 中古『源氏物語』・『枕草子』(図4②)

〈アル〉系統では①上代と同様に「～テアリ」が進行態・結果態に用いられている。

〈イル〉系統では「～テキル」が成立した。「～キル」が進行態に、「～テキル」が進行態・結果態に用いられている。

〈オル〉系統では「～ヲリ」が進行態に、「～テヲリ」が進行態・結果態に用いられている。①上代と比べると、本来は結果態の形式である「～テヲリ」が進行態に侵入した状況が認められる。

③ 室町時代中期『史記抄』・『四河入海』(図4③)

〈アル〉系統では①上代・②中古と同様に「～テアル」が進行態・結果態に用いられている。

〈イル〉系統では「～テイル」が進行態・結果態に用いられている。「～イル」は消滅した。このことには、中世になって「キル」の語頭の［ui］の音が［i］に転じたために、動詞連用形の［i］の音につくことが多かった「～イル」が同一母音の連続を避けて衰退する傾向にあったことも関わっている。この段階で「～テ」による進行態・結果態の統合が〈イル〉系統において完了した。

〈オル〉系統では②中古と同様に「～オル」が進行態に、「～テオル」が結果態に用いられている。

④ 室町時代末期・江戸時代初期『虎明本狂言』(図4④)

〈アル〉系統では①上代・②中古・③室町時代中期と同様に「～テアル」が進行態・結果態に用いられている。

〈イル〉系統では③室町時代中期と同様に「～テイル」が進行態・結果態に用いられている。

〈オル〉系統では「～テオル」が進行態・結果態に用いられている。「～オル」は消滅した。このことには「～オル」が卑語化したことも大きく関わっている。この段階で「～テ」による進行態・結果態の統合が〈オル〉系統においても完了した。

以上①～④が柳田1990での記述の抄録である。

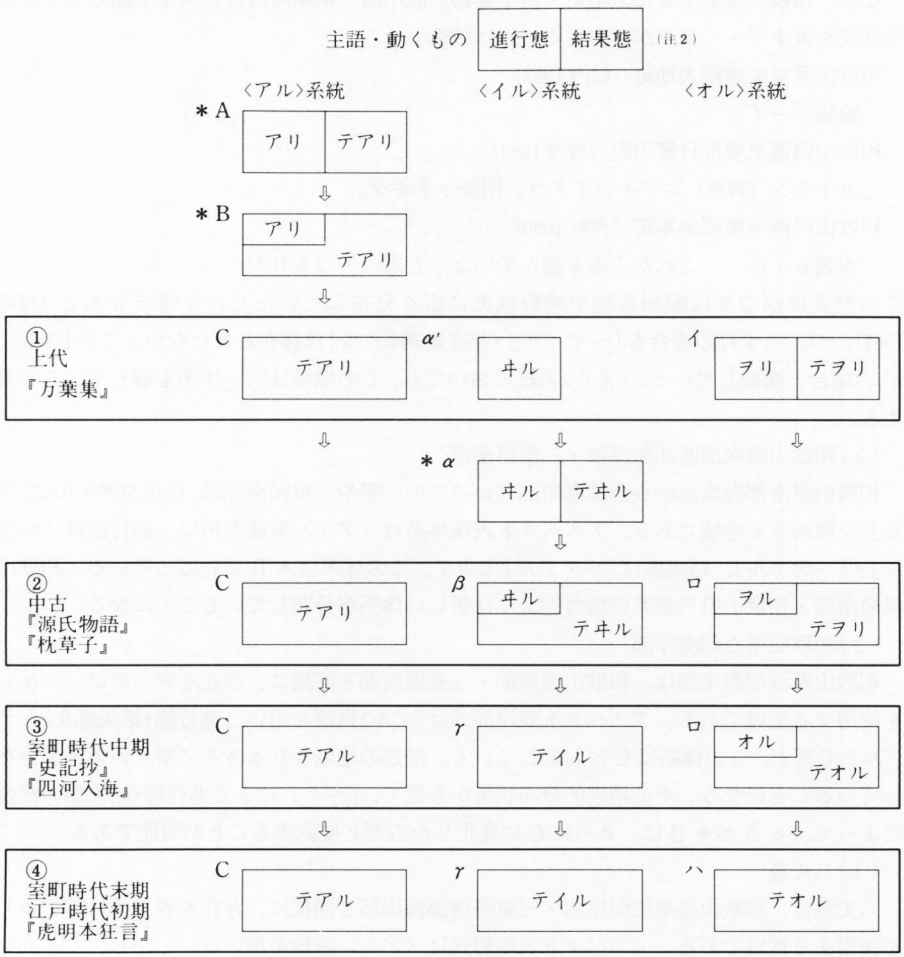
2-2 推定形＊A・＊B・＊α

文献において〈イル〉系統・〈オル〉系統の「～テ」による進行態・結果態の統合が起こったことを確認してきた。〈アル〉系統の統合は文献からは読み取れなかった。が、1で見てきた進行態・結果態の統合現象、および2の①上代から②中古、③室町時代中期を経て

④室町時代末期・江戸時代初期へ至る「～ヲリ」・「～テヲリ」の動き、つまり「～ヲリ」が進行態を、「～テヲリ」が結果態を表すイから、「～ヲリ（～オル）」が進行態を、「～テヲリ（～テオル）」が進行態・結果態を表すロを経て、「～オル」が消滅し、「～テオル」が進行態・結果態を表すハに至る流れを考えあわせると、C以前に＊A・＊Bの体系を推定することができる。＊Aは「～アリ」が進行態を、「～テアリ」が結果態を表現する体系、次の段階の＊Bは「～アル」が進行態を、「～テアル」が進行態・結果態を表現する体系である。

また、〈イル〉系統でも、進行態・結果態の統合の流れおよび「～オル」・「～テオル」の変遷に対応させて、β・γ以前に「～ヰル」が進行態を、「～テヰル」が結果態を表現する＊αの体系を推定することができる。

図4　進行態・結果態の変遷



3 方言における状況

ここでは図4の各体系と各地方言との対応関係を見ながら、アスペクト表現の歴史について総合的な解釈を試みたい。なお、ここでも扱う対象は「動くもの」が主語である場合に限定している。

3-1 各地方言

(1)和歌山県最南端・和歌山県三重県県境付近

和歌山県最南端・和歌山県三重県県境付近は、存在を表すのに「アル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈アル〉系統を用い、進行態は「～アル」、結果態は「～テアル」という使い分けが存在する。この体系は〈アル〉系統の中でも古い＊Aに対応している。

なお、和歌山県東牟婁郡太地町・西牟婁郡日置川町・串本町には、人を主語として意志的継続を表す「～イル」が存在する（井上1989)。

和歌山県東牟婁郡太地町（村内1982)

勉強シーイヨ

和歌山県西牟婁郡日置川町（村内1982)

カイモン（買物）ニイキーイタラ、雨降ッテキタ。

和歌山県西牟婁郡串本町（大野1990)

本読みイル　　これから本を読んでいようと思う・つもりだ

この形式はかつては紀州各地や熊野地方に広く分布していたという報告もある（楳垣1961)。が、いずれの場合も「～テイル」・存在動詞「イル」は存在していない。この状況は、α'の場合と類似している。〈イル〉系統においても、この地域は古い体系を残していると言える。

(2)和歌山県南部西部海岸部・三重県南部

和歌山県南部海岸部から西部海岸部にかけての一帯や三重県南部は、存在を表すのに「アル」を使用する地域である。アスペクト表現体系は〈アル〉系統を用い、進行態は「～アル」・「～テアル」、結果態は「～テアル」で表す。この体系は＊Bに対応している。和歌山県最南端・和歌山県三重県県境付近よりは新しい体系が分布していることになる。

(3)和歌山県西部海岸部

和歌山県西部海岸部は、和歌山県南部・三重県南部と同様に、存在を表すのに「アル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈アル〉系統を用い、進行態・結果態を「～テアル」で表す。この体系はCに対応している。前述の地域よりもさらに新しい体系が分布していることになる。その地理的分布状況から見て、「～テ」による進行態・結果態の統合によって、＊Aが＊Bに、さらにCに変化したのだと推測することが可能である。

(4)八丈島

八丈島は、和歌山県南部海岸部・三重県南部海岸部と同様に、存在を表すのに「アル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈アル〉系統を用いる。しかし、八丈島が

上記の地域と違うのは、進行態も結果態も「〜テアル」で表すことである。両態の使い分けが存在しない体系はCに対応する。ここでも「〜テ」による進行態・結果態の統合によって＊AがCに変化した可能性はある。

(5)関西中央部

関西中央部は、存在を表すのに「イル」・「オル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は、〈イル〉系統・〈オル〉系統を用い、進行態も結果態も「〜テイル」・「〜テオル」で表すが、「〜テオル」や存在動詞「オル」には軽卑的要素が加わっている。関西周辺部には待遇的に中立のアスペクト表現形式としての「〜テオル」が分布していることもあり、関西中央部でもかつては「〜テオル」がアスペクト表現形式として機能していたと思われる。が、現在の状況に基づいて、ニュートラルなアスペクト表現形式としての体系を考えると、関西中央部の体系は〈イル〉系統の中でも新しいγに対応する。

(6)関西を除く西日本

関西を除く西日本は、存在を表すのに「オル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈オル〉系統を用い、進行態を「〜オル」、結果態を「〜テオル」で区別するイに対応する体系、進行態を「〜オル」・「テオル」、結果態を「〜テオル」で表すロに対応する体系、進行態も結果態も「〜テオル」で表すハに対応する体系が分布している。

(7)長野県南部

長野県木曽郡楢川村奈良井字羽淵・川入地区・開田村・三岳村大字黒沢・木曽福島町新開(旧新開村)などでは、存在を表すのに「イル」(「イダル」)を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈イル〉系統を用い、進行態は「〜イル」(「〜イダル」)、結果態は「〜テイル」(「〜テイダル」)という使い分けが存在する(馬瀬1983)。この体系は〈イル〉系統の中でも古いほうの＊αに対応していると言える。ただし、各種の動詞について総合的に見ると、この方言にはβが存在している可能性も考えられる。この点の解明は今後の課題である。

なお、長野県木曽郡南部・下伊那郡南部では、アスペクト表現形式は〈オル〉系統を用い、進行態は「〜オル」、結果態は「〜テオル」という使い分けが存在する(青木1983)。この体系はイに対応する。これは近畿を除く西日本にも見られるが、「〜オル」の分布の東限であるこの地域に古い体系が存在していることは興味深い。

(8)東日本

東日本は、存在を表すのに「イル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈イル〉系統で、進行態・結果態を「〜テイル」で表す。この地域の体系はγに対応している。〈イル〉系統でもっとも新しい体系と言うことができる。

3-2 方言全般

以上見てきたように、図4における文献からの推定体系は理論上のものだけではなく、実際に方言として存在することに注目したい。文献に現れた変化と方言に生じている変化は、同様の流れの上にある。かつて中央で起こった変化が方言に投影している。現在の方言分布は歴史的変化の縮図とも言えるのである。

進行態・結果態の統合は、歴史的にこの変化が起こった段階では内在するものによる変化であったと考えられる。この変化は地域によって速度に差があり、変化がまったく起こっていないところでは進行態・結果態をはっきりと区別し、進行中のところでは進行態に結果態の語形が侵入しつつあり、すでに完了しているところでは進行態・結果態を本来の結果態の語形で表しているわけである。この変化がまったく起こっていなかった地域にとって、進行態と結果態とを統合に導いたものは、近代になっての標準語の干渉であったと推測される。また、この変化が中間段階まで進行していた地点にとっては、標準語はこの変化に加速度を与えたと思われる。進行態・結果態がともに「〜テ」の形で表現されるという状況は、進行態・結果態が未分化となっている標準語の体系に近づくものだからである。形式は標準語と異なるものの、その体系は標準語の干渉を受け、認識上の区切りの変化を起こしつつあるのだと考えられる（真田 1991）。

3-3 「〜オル」の残存について

ところで、現在、〈オル〉系統であるが「〜オル」が存在せず「〜テオル」だけでアスペクトを表している地域に、「〜オッタ」・「〜ヨッタ」などの特定の（一部では接続を異にする）形式で、過去の動作進行や未然形過去、回想などの意味を限定的に表すところがある。たとえば、静岡県浜名郡新居町・愛知県東部（三河）の過去の将然態（未然形過去）の「〜オッタ」、島根県の過去の進行態（過去の動作進行）の「〜ョーッタ」[注3]、三重県志摩郡以北（中勢・北勢など）の回想の「〜ヨッタ」などがそれである。

静岡県浜名郡新居町（山口 1985）

落チルオッタ　（あぶなく）崖から落ちるところだった

降ラレルオッタ　（もう少し畠にいたら）雨に降られるところだった

愛知県東部（真田 1981）

雨ガ降ルオッタ　降るところだった

島根県出雲市・隠岐郡（神部 1982）

ムカシハ　エキョーッタ　ワナ。　昔は行っていたよ。

三重県志摩郡以北（佐藤 1982）

ナサケナカリヨッタ。

ヨー　コーオッタ。　よく来たりしたものだった

これらの地点には隣接して進行態のアスペクト表現形式としての「〜オル」が分布していることから、かつてこれらの地点でも「〜オル」が進行態のアスペクトとして使用されていたと考えられる。したがって、この状況は、ロからハのような段階、つまり「〜テ」による進行態・結果態の統合が起こり「〜オル」が消滅していく段階において、進行態の用法が変容して残存したものだと推定されるのである。

注1　ここでのデータは大阪大学大学院における社会言語学演習での御所—新宮間グロットグラム調査（1986）によって得られたものである。なお、アスペクトの項目は筆者が担当した。

注2　図4における進行態・結果態の枠の大きさは、それぞれを表現する形式の使用頻度とはかかわりがない。

注3　なお、琉球列島の一部には共通語的発話としてではあるが、過去の継続的動作の回想・報告の「～ヨッタ」が存在する。

奄美大島戸口（永田1988）

降リヨッタナア　　昔はよくこのあたりでは雨が降ったなあ

書キヨッタ　　あの人は上手に字を書いていたよ

参考文献

青木千代吉（1983）「中部方言と国語教育」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一／編『講座方言学　6　中部地方の方言』国書刊行会

井上文子（1989）「紀伊半島海岸部方言におけるアスペクト表現――イル・オル・アルに焦点をあてて――」『日本学報』8　大阪大学文学部日本学研究室

井上文子（1990）「アスペクト表現」真田信治・宮治弘明「奈良県西吉野・大塔地域の言語調査報告」『日本学報』9　大阪大学文学部日本学研究室

楳垣　実（1961）「西部方言概説」東条　操／監修『方言学講座　3　西部方言』東京堂

大野仁美（1990）「串本方言の動作態の継続を表す形式――「ヤル」・「イル」・「ヨク」――」第100回日本言語学会大会発表要旨

神部宏泰（1982）「島根県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一／編『講座方言学　8　中国・四国地方の方言』国書刊行会

佐藤虎男（1982）「三重県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一／編『講座方言学　7　近畿地方の方言』国書刊行会

真田信治（1981）「方言」北原保雄・鈴木丹士郎・武田　孝・増淵恒吉・山口佳紀／編『日本文法事典』有精堂

真田信治（1991）「社会言語学から見た言語変化」『日本語学』10-4　明治書院

永田高志(1988)「沖縄に生まれた共通語の文法」『日本方言研究会第47回研究発表会発表原稿集』

馬瀬良雄（1983）「長野県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一／編『講座方言学　6　中部地方の方言』国書刊行会

村内英一（1962）「和歌山県方言」楳垣　実／編『近畿方言の総合的研究』三省堂

村内英一（1982）「和歌山県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一／編『講座方言学　7　近畿地方の方言』国書刊行会

柳田征司（1990）「近代語の進行態・既然態表現」『近代語研究』8　武蔵野書院

山口幸洋（1985）「方言体系」『新居町史　3　〈風土編〉』

――大阪大学院生――

（平成4年7月13日　受理）

（平成4年9月28日　改稿受理）